

日本エコレザの6つの条件

- 1 天然皮革である
- 2 発がん性染料を使用していない
- 3 有害化学物質の検査をしている  
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- 4 臭気が基準値以下
- 5 適切に管理された工場で作られた革  
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- 6 染色摩擦堅ろう度が基準値以上

※染色堅ろう度とは、染色された色が摩擦や使用条件にどれだけ耐えるかの指標



# 創業105年の伝統を礎に、 技術革新を続けてタンナーとして生き残る

出席者

川見 斉氏 (株)山陽代表取締役社長)

杉田 正見氏 (NPO法人日本皮革技術協会 理事長)

稲次 俊敬氏 (NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

環境対応の革への要望は、  
世界的な流れになっている

**杉田** 本日は姫路の大手タンナー・(株)山陽の本社に伺い、川見斉(かわみ・ひとし)社長のお話をお聞きするつもりになりました。

日本の大手タンナーとしては、これまで東京のニッピ、長野のメルクス、そして姫路の山陽が挙げられてきました。しかし、現在、タンナーとして残っているのは山陽さんのみです。山陽さんのホーム・ページを拝見するとタンナーとしての誇りを感じますし、世の中の役に立つ存在になりたいという理念がしっかりと伝わってきます。

**川見** 当社は姫路製革所としてスタ

ートし、1911年に山陽皮革に社名が変わって、今の山陽になりました。今年で創業105年になります。皮革は人類の歴史とともにある訳ですが、時代の変化やニーズの中で、さまざまな革素材が開発されてきました。

革の風合いや肌触りといった本物の天然皮革としての魅力を引き出していくと同時に、今後もさまざまな工夫と革新を重ねながら、タンナーとして継続できる道を探っていかなければなりません。

**杉田** 山陽さんの革には、日本エコレザ(基準) JES Japan Ecoleather Standards)の認定を受けたものもありますが、今後は全ての革を環境対応させていく、とお聞きしていますが、こ

の点について詳しくお聞かせください。

**川見** 革には現在、安心・安全が求められ、既にヨーロッパでは大変厳しく規制されています。近い将来、日本もそうなっていくことでしょう。当社の取引先は大手メーカーが多いので、今後はグローバルな基準に従っていかなければ、メーカーさんのサプライチェーン(生産・物流管理)に参加することが困難になりかねません。今から安心・安全に対応していかなければなりません。

**杉田** 革は触れば肌触りの良さはわかりますが、品質の良さは、一般の消費者にはわかりにくいですね。しかしながら、日本エコレザ(基準)認定ラベルが付いていれば、品質の保証になり



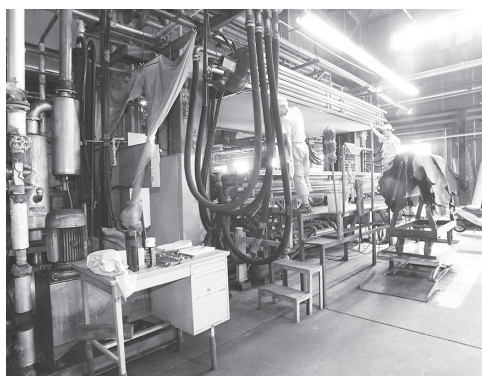
姫路市の山陽本社にて



工場の一角にあるタンニン槽



川見 齊氏



大型の乾燥機を導入している



再びカーフの製革も始めた

ますね。

**川見** そうですね。天然皮革の魅力伝えるには、ナチュラルというテーマは効果的です。当社としても、いま人気の

植物タンニンレザーを大いにアピールしたいのですが、生産量は全体の15%に過ぎません。やはり革鞣しの主流は85%がクロムです。この数字は、世界の革生産とほぼ同じ比率です。

ですから、クロム鞣し革でもナチュラルで安心・安全を謳える革をつくっていかなくてはなりません。その点、JES認定制度はとても重要なツールといえます。

### 革のランドセルに使われれば エコレザーの啓蒙になる

**杉田** 我々が日本エコレザー基準認定制度をつくるとき、最初に検討したのはヨーロッパの繊維製品を対象としたエコテックス100の基準値でした。

しかし、これはクロムに対する基準値が非常に厳しく、現状のクロム鞣しの革はすべて不適合となる基準でした。それでは、皮革業界にとっては現実的ではないので、ドイツのSGラベルを参考にすることにしました。これは、皮革製品の基準で、皮革というものをよく熟知した現実的な基準であり、クロム鞣し革でも安心・安全な革としてアピールできます。

**稲次** 安心・安全をアピールできる日

本エコレザーの用途として子供のランドセルがあります。ランドセルの表面にJESラベルがついていれば、安心・安全な製品を求める親御さんや祖母さんにとって注目度はより一層高くなることでしょう。さらにファーストシューズ(生後、初めて履く靴)やベビージューズでの用途も同様だと思います。

売場で製品を選ぶとき、安心・安全のラベルが付いているか、付いていないかで、購入の判断は変わってきます。値段が多少高くても、ラベルが付いている方を買いたいと考える人は出てくるでしょう。

**川見** 以前、ランドセル用の革を多く生産してきましたが、買う方が親御さんである場合、軽くて手入れの楽な人工皮革が主流になっていました。しかし、最近は本物志向からか、再びランドセル用の革という声も上がってきています。

夏休みなどにお孫さんが帰省した折に、お年玉ならぬお盆玉としておじいちゃん、おばあちゃんが革製のランドセルを買ってプレゼントするのですね。ランドセルは6年間の使用に耐えねばなりません。丈夫で、人と環境に優しい日本エコレザーのものだと、プレゼントとして見栄えもいいし、幼少期



杉田正見氏



稲次俊敬氏

からエコロジーに関心を持たせるなど、環境教育の一環となることでしょうかね。こういったストーリー展開も日本エコレザラーの普及につながっていくでしょうね。

### 誰もが挑戦できるJES、差別化のお墨付きになる

**杉田** あるタンナーさんから、革を輸出するので分析データが必要になったという相談が来ました。JESの分析データを付けないと、「日本製の革です」と言っても、海外の革とどこが違うのか、ということになります。JES認定の革なら特定芳香族アミンを生成する染料はもちろん、6価クロム生成の心配もありません、という保証にもなります。

**稲次** JES認定は国内企業に限った制度ではありません。海外の企業が認定に挑戦してくるようになれば、JESの知名度も上がり、グローバルスタンダードになることが期待できます。

実際、バングラデシュで下地がつくられ、日本で最終仕上げされた革の中にJES認定を受けているものがあります。

す。この下地をつくった工場がある一角は、バングラデシュでも工業団地として環境が整備されており、排水処理も適正に処理されていることを、(社)日本皮革産業連合会でも確認しています。

これからは、「日本産の革」というだけでは、訴求力は弱いでしょう。海外でも同様の環境ラベルはありますが、認定取得数は非常に少ないようです。JESはスタートして7年目になりませんが、認定数はすでに革と革製品を併せて600件を超えています。日本エコレザラーの輸出は、今が契機ではないでしょうか。

**川見** 当社では、タイのタンナーで委託生産し、東南アジアの大手靴メーカーに供給する、という話が今進んでいます。海外の有力企業が探しているのは、エコレザラーのようです。

今後、日本の大手メーカーも海外と同じように環境対応に注目して行くことでしょうか。当社としても大手タンナーの監査システムを持つレザラーキンググループからも認定されるような、グローバルスタンダードの土俵に乗れることを目指したいものです。

### 自社革のブランディングも行ない、攻勢をかけていきたい

**杉田** 現状のJESに対して何かご要望はありますか。また、タンナーとしてのメッセージをお聞かせください。

**川見** いま当社の革でJESに認定されているものは23種類です。常時生産する革の1割にも満たない数ですが、今後この数は増やしていこうと考えています。申請に際して革を分析してみると、不適合項目が見つかり1回ではクリアできない革もあります。その際は、日本皮革技術協会から技術改善という指導もしていただいております。大変助かっています。

タンナーは市況だけでなく、原皮相場や為替変動のリスクが伴う業種ですが、これまでの縮小から拡張へと、反転攻勢をかけていかなければなりません。そのためには、国内にある製品メーカーの直近にあるタンナーとしての利便性を生かし、製品メーカーの企画段階にも参加させていただき、製品の付加価値をさらに高めていきたいものです。同時に、自社のブランディングも行いながら、生き残り策を追求していきたいと考えています。